

## 第1分科会

### 「労働と発達を考える」

共同研究者 滋賀大学教育学部 教授 白石 恵理子  
助言者 (公社)大阪聴力障害者協会 常任理事 小西 正  
司会者 いこいの村・栗の木寮 呉竹 一人  
たましろの郷 佐藤 嘉昭

#### はじめに

当分科会には施設職員その他、聴覚障害者協会職員、利用者の方など、27名に参加して頂きました。

#### レポート報告の概要

(1)「金銭管理の意識を高める生活支援」

京都市聴覚言語障害センター  
第2 あおぞら就労支援事業所  
宮川 勝・山口 祐介

金銭面で浪費傾向にあるSさん。日々、模索しながらの支援。利用者にとって楽しい豊かな生活に結びつく支援に向けての報告。

この報告に対し、年金は2ヵ月に1回の支給は、障害の有無にかかわらず見通しが立てにくい面でもある。また、浪費には様々な理由がある。本当の理由を掘り下げてみるのも良い。浪費に向かう心理としては、何か満たされていない事があるかもしれない。金銭管理だけを考えるのではなく、裏にある本質を見極める必要がある。などの意見があった。

(2)「働くことを通して居場所を見つけるAさんの支援」

第3 ほくぶ障害者作業所  
片岡 佑美

現在一人暮らしのAさんは、仕事に

対しては消極的。職員との信頼関係や仕事への達成感を感じてもらえるような支援を心掛けて、支援している。Aさんの居場所作りと、職員としての役割と繋がりについての報告。

この報告に対し、一人ひとりに合った好きになってもらえる仕事を見つけ、提供するの支援員の役割の一つ。そして、社会への理解を広げ、弱者の社会参加の場を開拓してほしい。などの意見があった。

(3)「高齢期を、豊かに生きるとは」

いこいの村聴覚言語障害センター  
栗の木寮  
小畑 誠

現在の平均年齢は62.7歳。「仲間にとって働くことは社会参加をすること、労働を通じて人格の豊かな発達を保障する」この仲間が大切にしてきた言葉を元に、今年度から新たに仲間の健康と豊かな高齢期を創り出す取組みを報告。

この報告に対し、労働の考え方は自分たちを基準に考えてしまいがちだが、仕事以外の経験の機会も増やしてはどうか？また、現在施設改築の相談中。この機会に、仲間から意見をもらい、共に暮らしやすい環境をみんなで考えてはどうか。などの意見があった。

(4)「びわこみみの里 トリミング資格取得に向けて」

びわこみみの里  
小笠原 千鶴

専門職でトリマー養成における職員と利用者の関係性。「利用者と対等である支援者」、「確かな技術の指導者」、「一般就労への橋渡し役」として取り組んでいきたいとの報告。

この報告に対し、トリミングに特化した移行支援。「すごい」という率直な感想や、トリマー養成としての専門性と移行支援者としての専門性。この多面性の支援の難しさの中で、利用者のプラス面をどう引き出していくのか難しい。しかし、とても大切なことなので頑張っていてほしい。などの意見があった。

(5)「高齢者が集える場所と労働のあり方」

北摂聴覚障害者センターほくほく  
牛村 友実香

自治会の役割と仲間同士のルールやマナーへの理解。約9割が65歳以上の仲間と高齢者。古くからの知り合い同士でトラブルがあり、ルールを決めた。他の実践を伺いたいとの報告。

この報告に対し、地域の方々のための施設。古くから構築された人間関係の中に、新しい職員が入り、施設上のルールを決めていくのはなかなか難しい。喧嘩することが生きがいの一つと捉え、見守ることも大切。との意見や、高齢者に対する仕事の提供、開拓の方法などの情報交換もあった。

(6)「目標に向かって Hop Step Jump」

たましろの郷  
河村 歩美

作業を通じたなかまと職員の関係。週の終わりに、限られた時間で今週の目標は達成できたのか、振り返りを行う。最近、「将来は一人暮らしをして、仕事に通いたい」と、夢を持つようになった。

その夢を実現するためにも各作業に意欲を持ち、将来への見通しが持てる様に支援して行きたいとの報告。

この報告に対し、障害の発達的な面での視点も必要。また、マニュアルと自己流、それぞれのメリットがあり、マニュアルを準備することで、それがプレッシャーになる人もいる。自分なりのやり方のほうが自分らしくできる人もいる。など、意見が寄せられた。

まとめにかえて

共同研究者からは、「社会では、効率を求めた労働が最も重要視されているが、この分科会では『発達、生きがい、自己実現、共感、居場所、社会参加』と、それぞれの視点で職員が仲間と共に考えながら働くことをテーマにしている。仲間らしい労働を職員が共感してほしい。『働く＝効率』ではなく『働きがいのある、人間らしい仕事』を仲間と共に考え、提供してほしい」と、まとめられた。

助言者からは、「現在の福祉制度に沿って働き、支援するだけではなく、制度と現場の矛盾をしっかりと把握し、運動へと繋げて欲しい」との言葉を頂いた。

以上